

古びない、純粹ナンセンス

李箱作品集

また見つかった、逆立ちの永遠が。東の海に沈む太陽だ。いや、ナンセンスの佳作群です。存在の耐えられない愚劣さ、滑稽さ。自分を取り囲む「何ともいいがたいもの」。だから、打ち破りようもなく、自殺もせず、狂いもせず、ひたすらドロップアウトを決めこむ。デカダンスを生きる。あんまりバカらしくて深刻になんか、なれやしない。自分自身を笑い、取り囲む悪意に微笑みかえせば、世界に笑い飛ばされるドウドウメグリ。



李箱 著

崔真碩 編訳(作品社・三九九〇円)

日帝統治下の朝鮮半島で、そんな青春をめぐりに言葉に彫りだした李箱の小説は、今日、韓国の若い人に人気が高い。留学生たちはいっしょに「とても好き。でも、その理由を説明するのが難しい」。でも、今度の崔真碩の翻訳で、たいい腑にもちた。

イ・サン 1910-37年。旧朝鮮の作家・詩人。著書に『十二月十二日』など。日本語で書いた作品も多数ある。

とりわけ巻頭「蜘蛛、豚に会う」。相手は「たしかに存在する」が「何ともいいがたい」世界だ。そんなヤツに意味など与えず、逆に意味を抜いてしまつこと。李箱は一九二〇年代日本の饒舌体ナンセンス小説群に出あい、彼の言葉遊びとパラドクス好きの才気に火がついた。それを読んでみると、日本のモダンスト、たとえば横光利一が、帝国主義や資本主義など世界のしくみを相手とり、気の利いた作品にしたてようとしてあがきすぎていることに気づ

かされる。そのパロディみたいな李箱のナンセンスの方が純粹で、もの哀しい。その分、古びない。文学史のパラドクス。むしろ才気を抑えた「翼」には、寝取られ男の自嘲と墮天使の哀しみがうつすらにじみだす。東京で書かれた「終生記」は、ぐっと太宰治に近接している。

どんな小説にも意味を読みとろうとする、ナンセンスを「難解」にしてしまつ。人生には染み抜きも息抜きも必要だ。たまには世界の意味抜きを、とつぞ。すると、とつぞ。虚無に化した青空に、まるで間尺にあわないモノサシをかりまわし、世界の裁断に踊り狂う仕立屋どもの影絵が映しだされているではないか。

〈評者〉鈴木 貞美 (国際日本文化研究センター教授)